
冬の星と彼女と僕

蜜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬の星と彼女と僕

【Nコード】

N7396I

【作者名】

蜜子

【あらすじ】

いつものように、彼女は唐突だった。

「満天の星空が見たい。今夜付き合って。」

どこか奔放に振舞う「彼女」に付き合う「僕」のある日の出来事。
ほんのり甘くてほっこりするような短編です。

いつものように、彼女は唐突だった。

「満天の星空が見たい。今夜付き合つて。」

朝の5時過ぎに鳴ったメールの着信は、目覚ましアラームよりもう少し短かったのに、低血圧気味の僕を目覚めさせるのに、十分な役目を果たしてくれた。

ろくに回らない頭を一生懸命動かしながら、次々と浮かんでくる迷惑、非常識極まりない、などという文句が次第に彼女だからという諦観に変わる。

もそもそと布団の中で、了解という短い単語をなんとか打ち出した。

返信はなかったたので、僕は溜息を貴重な温もりをとどめたままの布団の中に吐き出して、再度夢の世界へ旅立つことに成功した。

あと2時間ほどすれば、現実という名の戦場へと舞い戻らなければならぬ。せめて今だけは、ほんの束の間の安らかな休息を、惰眠という名をつけて貪ろうと思った。

朝は綺麗に晴れていた。洗濯日和だった。

お昼もすぎた頃には、あつという間に表情を翳らせた空は、いつものまにやら真っ白の溜息を空から降らし始めた。

約束の時間には、雪は5センチほど積もっていた。

雪と同化しそうな真白のコートに夏の空よりも濃い青のマフラーに顔の半分程埋めた彼女は、

「世界がこんなに壊れてるから、私が壊れていてもおかしくないね」とやけに真面目な顔をして言った。

こんなところだと天気が変わるのはおかしい。その主張は天

気よりも変わりやすい気分屋の彼女の口から出るとなんだか面白い。

「うん。これじゃあ星が見えないね」

彼女が悲劇ぶるのには僕は慣れていたので、きわめてのんびりとした口調を心掛けながら言った。

「冬の星は綺麗なのにね。空気が澄んでいるから」

「澄んでる？寒いだけでしょ」

彼女は少しだけかさついたピンクの唇を尖らせた。

「人の生きるこの世界はひとの吐き出した二酸化炭素に満ちているし。そこから酸素を取り込まなきゃ生きていけないなんて、ほんとにぞつとする」

彼女は潔癖症ではない。彼女は掃除ができない。したことがないことをできるはずがないという。彼女のワンルームは週に一度、僕が掃除をしている。一度、自分でしなさいと提案してみたところ、「どんなゴミ溜めでも私は生きていけるけど、あなたは無理でしょ？だから一緒にいるためには、あなたが努力してくれなきゃ」と僕の一番好きな笑顔で言われた。

出逢った頃から、一緒にすごすための努力は惜しまないと決めている。惚れた弱みなんて言葉を擦り切れるほどに繰り返した僕はそのときも同じように念仏のように頭の中で唱えた。

「ちよつと唇が荒れてるよ」

彼女は突然背伸びをして僕の唇に最近購入したという某美のカリスマが大絶賛したというリップを塗り始めた。思わず及び腰になる僕の唇は艶々の光るジェルに覆われた。

そして最後の仕上げとばかりに、彼女は軽くキスをする。

「わたし、キスは好き。だから唇のケアはちゃんとして？」

「・・・うん」

彼女が下ろしたブーツの踵で、灰色の雪がぐしゃりとつぶれた。

まるで僕の心臓みたいだ。

冬の星を見たがった彼女の思いとは裏腹に、空はぐずり続けた。とても満点の星空を見上げて、というわけにはいかなかった。

「待てど暮らせどこぬひとを、宵待草のやるせなさ」

なんだか、薄暗いものを背負った彼女が歌う。

「今宵は月も出ぬそうな」

オクターブ高い音程がちょっと怖かった。

ていうか、いつの歌ですか。

なんであなたはそんな古い歌を歌えるんですか。

原詩の方を知っている僕は突っ込むこともできずに、どこかむくれたままの彼女の傍で、さてどうやってなだめようかと考えあぐねた。

天気予報は、このまま晴れないだろうとのつれない予測をたててくれている。星が見れる場所までドライブっていうのも、互いに明日も朝から仕事があるので、難しそうだ。

プラネタリウム、はこのあたりにはない。もし探すとしても、この時間から観覧するのは無理だろう。

プラネタリウム・・・そのとき、僕の頭の中で、一番星よりも明るい豆電球のフラッシュが瞬いた。

「プラネタリウム、作ろうか」

彼女は僕の顔を覗き込み、「楽しそうだね」と頷いた。

いつもの笑顔より2割り増し無邪気な笑顔がやっぱり可愛いなあなんて思った。

手作りプラネタリウム。僕の一番好きなバンプの歌から思いついた。

厚紙、豆電球、テープと針・・・閉店間近のホームセンターに駆け込んで揃えた即席の材料と必死に向き合って、僕は久しぶりの工作にかなり真剣に取り組んだ。

「それ、やりたい」

「危ないよ」

身を乗り出した彼女を避けて、塩化ビニールの半円球体に穴を空ける作業が中断する。

「・・・これをこうして。気をつけてね」

「うん」

僕はいつでも彼女から差し出された手には無条件降伏する。

「これネットからみつけた星図なんだけど、これを見て穴を空けていくんだ・・・って、もうやっちゃってるし」

彼女は僕の方をまったく見向きもせず、どンドン穴を空けていった。

まあ正確な冬の空を再現する目的ではないのだからと見守っているうちに、あつというまにそれは出来上がった。

渡された小さな天体を見て、僕はかなり驚かされた。

小さな半球形は、見事に冬の空を模していた。大小の形も、方角や位置もほとんど一致している。

「そんなに星が好きだったなんて知らなかった」

「好き？」

意外なことを聞かれたかのように、彼女は目を瞬かせた。

「星に詳しいんじゃないの？」

僕の問いかけに少し考え込むような間を置いた彼女はいつもより少しだけ真面目な顔をしていた。

「日本地図って書ける？」

「・・・まあ、大体は」

「それって、自分が今生きて、いる場所だから書けるんだよね」

「まあ、そうなのかな」

「これも一緒でしょ」

指差した先には少しいびつな天体がある。

「今、生きて、存在している場所だから」

だから、知っているだけなのだ。

「いやいやいや」

大真面目な彼女に冷や汗を掻いた。

「・・・ちよつとそれはスケールがでかすぎます・・・」

だって僕は日本地図でさえも、海岸線やらの造形を正確に書き出す自信がない。住んでいる街の地図でさえもそつだ。

なんて曖昧なところに僕はいるんだろうか。

ぐるぐる考えているうちになんだか気分が滅入ってきた。

ていうかここは僕が凹むところなのか？

「まあどうでもいいから、早く完成させてよ」

あつさり。

やりたかつたのは穴を空ける作業だけだったらしい彼女の声が思考の小道に迷い込みかけた僕を現実に戻した。

了解しました。

あとは台座を組み立てて、半球を黒く塗って・・・作業工程を確認し始めた僕の腕を軽くつまんで引張る。

「ねえ、ここ見て」

「ん？」

桜色の爪が指し示した場所は、作りかけの夜空に、たくさん空けられた穴の中でもひととき小さな穴だった。

「一緒に、この星が見たかつたんだから」

思わず星図と見比べても、存在しない小さな星。

・・・実在しない穴を空けて恥ずかしい名前をつける気？

(後書き)

この小さな星の名前は、君とか、あるいは恋とか愛とか呼んでみようか。

以前mixiで公開していた短編です。

こちらで様々な作品を読ませていただき、久し振りに小説が書きたい気持ち少なからず湧き上がってきました。

私がそうだったように、ほっこりしていただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7396i/>

冬の星と彼女と僕

2010年10月8日15時26分発行